

A

書物と知とが一致した世界では、読み手としての個人の概念は明確には存在しえなかった。文字というメディアを大前提とする近代的書物の発展は、集団からの個人の離脱を意味すると同時に、書物の内容としては、知識の同型性と、その多数性の発展をも意味する。書物により自立した個人が、その同じ書物により目には見えない新たな集団を形成する。これが近代的書物の根本的性格であり、逆に言えば、近代的主体の根本的性格でもある。

(句読点とも 200 字)

B

集団的な口誦から、個人による読書への移行は、文字というメディアの役割が大前提である。表現、伝達、判読のために、字体の一定性、画一性が書物成立の必要条件になる。このことが結果として、書物の内容である知識の同型性をもたらす。独りで読書することによって、集団から独立した個人は、活字印刷により大量化した同じ近代的書物を媒介として、目には見えない集団を形成していく。ここにおいて、集団的な口誦と近代的読書は形態は変わっていても、その生み出す結果は変わらないといえる。

「読む」ことに対する「書く」という行為について考えてみると、書物成立のための必要条件により、内容が同型のものとして伝播されることが、ある程度は保証されている。そして、書き手は、自分の書物を媒介とした新たな集団の形成をも目的とすることができる。

「書く」という行為は、主体の内面の発露であるから、その近代的な主体について考える必要がある。近代的書物の発展が、同じ書物を媒介とした新たな集団を形成するとすれば、近代的主体の根本的性格も、その範囲内のものであるという制約を受ける。すなわち、近代的な主体は、その本人の個性のみで語られるものではなく、近代的書物によって形成された同型的、画一的な知を内に含むものなのである。とすると、その近代的主体自

身においては、「読む」と、「書く」という行為は、密接な関連性をもっているということになる。

以上のように考えると、「読む」と、「書く」という行為は、書き手と読み手という、単に対置される関係にあるのではなく、一人の近代的主体においては表裏の関係、つまり、ネガとポジの関係にあるのである。

(739 文字)